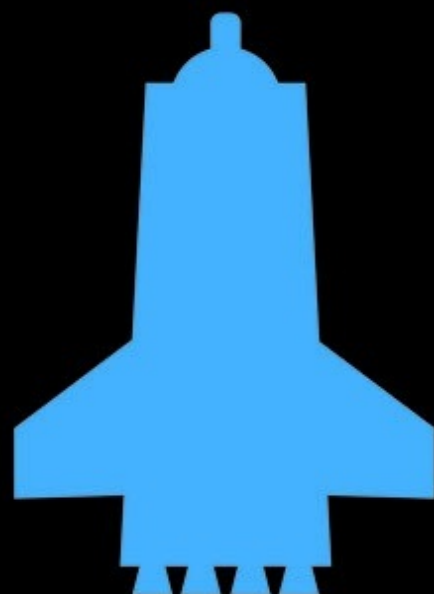
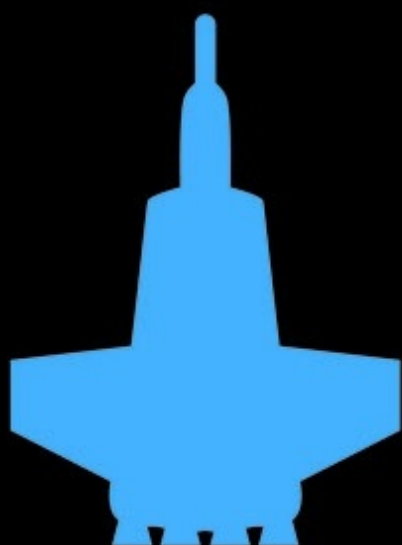
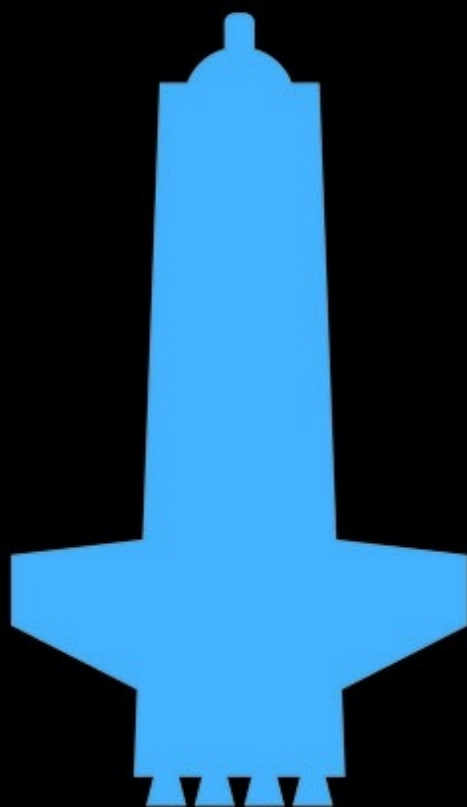
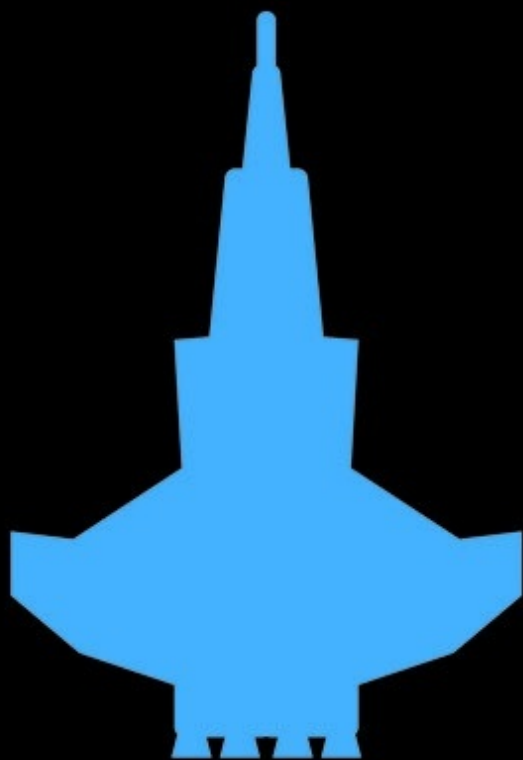


ガーフォオ星域大戦

1



白川昌司

宇宙は孤独。

「それは違う」と彼女は思った。

漆黒の闇のいたるところで星雲がうごめき、星を創り出し、光りきらめく。そして常に動き続けている。

星は輝き、いろいろな色の光を放ち続けて飽くことを知らない。宇宙はにぎやかで美しい。

彼女の座るコクピットは星たちの詰まった宝石箱の中を駆け巡る船のようだ。

「フォンダイナ中尉、3時の方向に未確認飛行物体多数を確認」

右翼の僚機からの報告を受けた彼女は物思いから現実に戻された。

すかさず自分のレーダースクリーンをチェックした。

「確認した」

物体が発する電磁波を測定した。重力パルスエンジンの波長を示している。

明らかに人工物である。宇宙船のようだ。

この宇宙域は凍てつく人の住めない第7番惑星レーページから500宇宙キロの距離にあり、民間の宇宙船はいない。

宇宙軍はレーページ駐留の自分達だけのはず。

フォンダイナ中尉は母艦あてに報告通信を発した。

「宛レンドログ。発第2322宇宙戦闘機中隊第2小隊アエリ・ナオ・フォンダイナ中尉。

1012。未確認飛行物体を発見。電波測定結果、宇宙船群と思われる。

数は約100。方位S W3。距離レーページから500宇宙キロ。相対座標X 821、Y 75、Z 524」

フォンダイナ中尉の率いる第2322宇宙戦闘機中隊第2小隊は飛行訓練中であり、迎撃専用戦闘機であるため、偵察には不向きだ。

「宛第2322宇宙戦闘機中隊第2小隊。発レンドログ。

偵察機を緊急発進させる。貴隊は飛行訓練を中止し、ただちに帰投せよ」

「了解。ただちに帰投する」

「ボング、ヘイベルーラ、180度反転、母艦に帰投する」

アエリ・ナオ・フォンダイナ中尉は機体を急旋回させた。後続の2機とも遅れずについてくる。

すぐに母艦の宇宙重戦闘艦レンドログが見えてきた。

レンドログから偵察機が2機発艦した。入れ替わる形でフォンダイナの小隊は着艦した。

コクピットの扉を開けて着艦フロアに顔を出すと、第2322宇宙戦闘機中隊隊長ログギアス大尉が待っていた。

「3人とも腕が上がったな」

「ありがとうございます。中隊長」

4人は歩き始めた。

「君達が発見した宇宙船群の主力らしき別働隊が、すでにアーページを攻撃している。目下戦闘中らしい」

「なんですって？」

「今のところ前面の宇宙船群から攻撃してくる徴候はない。だが距離からすると、おそらく我々も1時間以内に戦闘に突入するだろう。

急かせて悪いが、シャワーと軽い食事を済ませて、30分以内にブリーフィングルームへ来てくれ。

食堂でコック長が君達の戦闘配食を準備して待っている」

3人は隊長に敬礼すると足早に各自の部屋に戻った。

シャワーを浴びる準備を手早くすませ、服を脱ぎ、シャワーを浴びた。

「母星アーベージ。ふるさとの父母、弟...あいつは大丈夫か...親戚、友人達は大丈夫だろうか？」

ぞっとして頭を振り、タオルで体を拭いて出た。

各自の部屋から出てきた部下2人とともに食堂へ向かった。

「料理長、食事ください」

「よう、来たな。ほれ、食べな」

「パナパね。私、料理長の作るパナパ、大好きよ」

「ありがたいよ。ナオにそう言ってもらえると嬉しいよ」

3人は急いで席に座り、パナパを食べ始めた。パナパは一種の蒸しパンである。

「中尉、さっき小耳にはさんですが」

「何？ ボング」

「アーベージの第106宇宙艦隊は全滅したそうです。サーベージ第107宇宙艦隊が交戦中だそうですが劣勢です」

ボング少尉は情報通だ。いつも先に情報を持ってくる。そもそも最初に敵の宇宙船群を発見したのも彼女なのだ。

「悪い話しかないのね」

呆れ顔で返すフォンダイナの言葉に、すかさずヘイベルーラ少尉が話す。

「どこから来たのかわからない未知の敵ですからね。どう戦えばいいんでしょうか？」

「できることをやるだけのこと。訓練してきたことを全て出し切る！ 戦略や作戦は上層部が考えること。私達がとやかく悩むことではないわ」

「それはそうですが...」

「さ、食べ終わったらすぐ行くわよ」

アエリ・ナオ・フォンダイナも心の中では不安ではしようがないが、小隊長という立場上不安を掻き立てるような言葉は決して言えない。

「みんな不安。でも今は、闘志が必要」

と彼女は思った。

楽家であっても死は恐ろしい。だが戦うためには死を覚悟しなければならない。不安を打ち消す闘志がなければ戦えない。

思わず、彼女は武者震いをした。

3人とも食べ終わった。

「ブリーフィングルームでみなが待っている。行きましょう」

「了解！」

3人は素早く立ち上がると食器類を返却口に戻した。

食堂を出て駆け足でブリーフィングルームに向かった。

部屋には艦載機のパイロット達が全員座っていた。もちろんフォンダイナ達3人と偵察機の乗組員6人を除いて。

宇宙重戦闘艦レンドローク搭載の艦載機隊は第2322航空隊と呼称する。

第2322宇宙戦闘機中隊9機と第4322宇宙偵察小隊3機で構成されている。

航空隊隊長と航空長、第2322宇宙戦闘機中隊中隊長、その第1小隊僚機のパイロット2名、第3小隊のパイロット3名、第4322宇宙偵察小隊の居残り組の3番機のパイロット、偵察員、通信士の3名、合計11名がいた。

スクリーンのスイッチを入れながら航空長が立ち上がった。

「来たな。座れ、説明に入る」

ナオ達が座るのを横目で見ると話し始めた。

「1012、フォンダイナ中尉の小隊が訓練中に発見した宇宙船群だが、1045現在260宇宙キロまで接近している。接触まで40分弱だろう。

偵察のバックライレン大尉からの報告によると、敵の構成は要塞戦闘艦級1隻、重戦闘艦級3隻、軽戦闘艦級12、護衛戦闘艦級72、航空母艦らしきもの21、計109隻だ。

今朝、0800、アーベージが突然攻撃を受け、第106宇宙艦隊は全滅、第107宇宙艦隊は約10隻が生き残ったようだがエレフォース方面に退却したらしい。

これから接敵する宇宙船群はその別働隊と思われる。すでに第108宇宙艦隊全艦はレーベージを発進し、我々に合流した。

独立戦隊の第179軽航空母艦隊はキャタレーク恒星系に向けて船団護衛中のため不在だが第180軽航空母艦隊が加わる。

戦力の数においては互角だろう。

だが、第106、107両宇宙艦隊が大敗した敵だ、正体が不明である以上、油断はできない。我々も全滅を覚悟しなくてはならない。

エレフォースやキャタレークからの援軍が来るまでの辛抱だ。

承知しているだろうが諸君の任務は敵の攻撃機の迎撃である。

敵艦への攻撃はするな。それは航空母艦艦載機の仕事だ。

気を引き締めて行け。各自愛機で待機しろ。

発進は接敵10分前だ。以上」

「諸君に期待する。頼んだぞ」

最後に航空隊隊長が一言付け加えた。全員一斉に起立し、敬礼をした。

「発進準備急げ！」

航空長が叫び、全員駆け足で発艦フロアに向かった。

発艦フロアでは、整備兵達が忙しく働いていた。

各機の整備はほぼ終わり、多くは後片付けをしていた。

第2322宇宙戦闘機中隊の宇宙戦闘機F22フィードは迎撃戦闘機として開発されたもので、航空母艦搭載の主力戦闘機F20バランザとは種類が違う。

迎撃任務に主眼を置いた設計のため航続距離は短い。

武装は20ミリ機関砲2門、レーザー砲1門、中型のミフ宙対宙ミサイル8発、小型のマフ宙対宙ミサイル20発を装備する。

あくまでも艦隊護衛用なのだ。

発進すれば、艦隊の前面3宇宙キロの距離に進出して、敵の攻撃機を迎撃することが仕事だ。

コクピットに座り、艦内のコンピュータにアクセスして外の画像をスクリーンに映してみる。

すでに各航空母艦から発進した主力戦闘機、攻撃機、雷撃機が編隊を組んで飛んでいる。

第108宇宙艦隊の編成は以下のとおりである。

第108宇宙艦隊

第108戦隊

旗艦 要塞戦闘艦バルトルド 第108要塞航空隊

重戦闘艦レンドローク 第2322航空隊

軽戦闘艦タルフォロック 護衛戦闘艦3隻（キャルペット、ロンゴート、テルミック）

第86航空母艦隊

重航空母艦3隻（レンドル、ライカレッゾ、ピアソノピット） 第1256航空隊

第1257航空隊 第1258航空隊

重戦闘艦ジョイフォル 第2323航空隊

軽戦闘艦5隻（レティラック 他）

護衛戦闘艦15隻（シセリイ、ファルムバ、スケアラウス、ケアビル、セルポウ 他）

第178軽航空母艦隊

軽航空母艦5隻（エリオフィーク 他） 第3886航空隊 第3887航空隊 第3888航空隊 第3889航空隊 第3890航空隊

重戦闘艦ペンドシーク 第2324航空隊

軽戦闘艦5隻（セレセエイム 他） 護衛戦闘艦15隻（ヒサイラー 他）

第108護衛戦隊

軽戦闘艦9隻（ビッグデイル 他） 護衛戦闘艦27隻（フェウルズ 他）

第180軽航空母艦隊

軽航空母艦5隻（バライハル 他） 第3896航空隊 第3897航空隊 第3898航空隊 第3899航空隊 第3900航空隊

護衛戦闘艦30隻

要塞航空隊は主力の宇宙戦闘機F20バランザ36機、宇宙迎撃戦闘機F22フィード36機、宇宙攻撃機A18ホルク27、宇宙雷撃機B19マーゲイン27機、宇宙偵察機R21ドレシヤス9機。

重航空母艦航空隊は主力の宇宙戦闘機F20バランザ27機、宇宙迎撃戦闘機F22フィード9機、宇宙攻撃機A18ホルク27機、宇宙雷撃機B19マーゲイン27機、宇宙偵察機R21ドレシヤス3機。

軽航空母艦航空隊は主力の宇宙戦闘機F20バランザ9機、宇宙迎撃戦闘機F22フィード9機、宇宙攻撃機A18ホルク9機、宇宙雷撃機B19マーゲイン9機、宇宙偵察機R21ドレシヤス3機。

重戦闘艦航空隊は宇宙迎撃戦闘機F22フィード9機、宇宙偵察機R21ドレシヤス3機。以上で構成されている。

「全機発進せよ」

航空長の声が響いた。時間だ。残っていた整備兵が待避所に駆け込む。

まず中隊長機が発進した。続いて2番機と3番機。フォンダイナは4番目だ。

思いきり加速して艦を離れた。後ろからボング少尉機とヘイベルーラ少尉機がしっかりついてくる。

第3小隊も発進しつつあった。

すでに正面では戦闘が始まっていた。敵も艦載機を発進させているようだ。

F20バランザの直掩隊と入り乱れての乱戦状態だ。

攻撃機隊と雷撃機隊は敵の迎撃機の攻撃をかわして敵艦隊に攻撃をしかけようと突撃しつつある。

「来るぞ！ 各機迎撃せよ！」

中隊長が各機に命令を下した。

直掩隊の迎撃に洩れた敵機が速度をあげて迫ってきた。

フォンダイナ中尉の小隊は正面に現れた敵機に集中砲火を浴びせた。

すれ違い様、敵の機体を見た。

敵機は自分達の戦闘機よりひとまわり以上大きい。

戦闘機というよりは戦闘艇と言ったほうが近いかもしれない。

三角形をふたつくっつけたような矢印型をしている。

後ろにまわりこんで20ミリ機関砲を浴びせた。

戦闘機の機関砲では歯が立たなかった。

すかさずレーザー砲でわずかに手傷を負わせた。

そこに宙対宙ミサイルを集中的にぶち込んで破壊した。

息をつく暇なく、次の敵機の後ろにまわる。観察すると、後部に大きなエンジンが見えた。

エンジンに機関砲を集中的に射撃すると、あっけなく火災を生じ、撃墜できた。装甲は厚いようだが意外ともろい。

それを見たボングとヘイベルーラの2人も敵機の後部エンジンを集中的に攻撃し、各自1ずつ撃墜した。

フォンダイナ達が搭乗する宇宙迎撃戦闘機F22フィードだけでなく、フォストパイエン星域軍の航宙機のエンジンは全て、機体の大きさに比べて5分の1と小型だが、敵機の場合、ただでさえ大きい機体の3分の1はエンジン部のように見える。

フォンダイナ達の迎撃をくぐりぬけた敵機は、艦対宙砲火を浴びながら対艦攻撃を敢行し、多くの戦闘艦を撃沈していった。

間もなく艦隊同士の距離が2宇宙キロ近くまで接近した。直接艦対艦攻撃が交わせる距離だ。やはり敵のほうが射程距離が長かったようだ。

2.3宇宙キロから砲撃が始まった。攻撃をかわせなかった艦が爆発し炎上する。

軽航宙母艦3隻同時に、あるいは重航宙母艦が次々と、軽戦闘艦が轟沈した後ろでは護衛戦闘艦も次々と被害を受けて沈んでいった。

たまりかねた第108宇宙艦隊司令官は楯代りにするために旗艦の要塞戦闘艦バルトルドを前面に進出させた。

突撃してくる敵機を撃破しつつ敵艦隊へ突撃する。ようやく2.1宇宙キロになり射程距離に入った。バルトルドの重武装によって敵艦約30隻は撃沈した。

レンドロークの周囲から離れないように気をつけながら、フォンダイナは要塞戦闘艦バルトルドの最後を見た。

無数の被弾により各所で爆発を起こし飛散した。

生き残っている戦闘艦からの砲撃も、撃沈されていく艦が増えるにつれて少しずつ減少していった。

フォンダイナが旋回して敵機の後部にとりつこうとした時、僚機のヘイベルーラ少尉機が突然火を吹いて爆発した。

その流れ弾に当たったのか破片を受けたのか、彼女の機体も被弾した。ボング機は無事のようだ。

「中尉、帰艦してください。左翼に被弾してます」

「すまない、ひとまずそうする」

だが、頭をめぐらして見た母艦レンドロークはすでにいくつか被弾して、いたるところから炎を出していた。着艦はできそうもない。

後ろから追いつがってくる敵機を振り払いつつ、旋回し、逆に撃墜した。

もう一機の敵を後方に認めた。

「しまった、後ろをとられた！」

と思った瞬間その敵機は爆発した。何者かに撃墜されたようだ。ボング少尉が掩護してくれたのかと思い後上方を見ると黒い宇宙戦闘機がいた。

見覚えある機体。

「間抜けな操縦をしていると他のやつらみたいに撃墜されちまうぞ！」

アエリの耳に聞き覚えのある男の声が響いた。

「この声は！ ユラオン！」

「よう、姉さん！ 苦戦してるね」

アエリの弟だった。ユラオン・レル・フォンダイナ。

「何してるのよ?!」

「話は後！ 戦おう！」

「了解」

「あいつめ。傭兵企業『黒星雲』に入っているって手紙に書いてあったけど。宇宙強盗まがいの仕事をしてたはず。

あの機体は広報の写真で見た黒星雲戦闘機の型だし…」

アエリは心の中で思い出しつつ、敵機の後ろに回り込んで撃墜していった。

左翼の被弾は思ったよりもひどくはなかった。操縦に支障はない。

弟も優れた操縦を見せて、敵機を撃墜していった。周囲では、弟と同じ黒い戦闘機10機以上が暴れまわっている。

アエリ機の後ろに敵機が食らいついてきた。振り切ろうと反転にかかったところで、敵機が爆発した。

黒星雲戦闘機3機が後方から援護して撃墜してくれたようだ。

小隊長は弟の機だ。4機はぴったりと編隊飛行をして、またたく間に敵機6機を撃墜した。

あらかた敵機がいなくなると、まわりの様子がわかってきた。

ボング機は胴体右後方、右エンジン部から煙を出していたが、無事のようにだ。

むしろ、煙が幸いして、あまり敵機に狙われずにすんだようだ。

「姉さん、俺達の母艦に來いよ。どうせ、姉さんの母艦は沈んだんだろ？」

アエリはレンドログを見た。艦橋とエンジンは無事のようにだが、傷だらけの船体は痛々しい。

「失礼ね。まだ沈んじやないわよ。着艦は無理みたいだけど」

「じゃ、一緒に来るしかないじゃないか」

「そうね。仕方ないか」

ボング機が右翼に近寄ってきた。

「中尉、敵が撤退していきます」

そう言われてアエリは敵艦隊の方向を見た。確かに距離が遠ざかっている。6割は沈み2割は大破し、残り2割が傷付いて撤退している。

だが、味方はもっとひどい。生き残ったのは、宇宙重戦闘艦レンドログ、宇宙護衛戦闘艦セルポウ、フェウルズの3隻のみである。

3隻とも傷付き、かろうじて航行している。他の艦艇は全て沈んでいる。

敵艦隊に攻撃を仕掛けた航空隊は全滅した。

全航空隊で生き残ったのは、現在確認できただけで3機。

アエリ・ナオ・フォンダイナ中尉、コーミ・ボング少尉、第2322宇宙戦闘機中隊中隊長ペトグ・ログギアス大尉の3人のみ。

だが中隊長は深手を負い、重傷だった。

「しっかりしてください！ 中隊長！」

アエリは大尉に呼び掛けた。

「中尉、無事のような。大丈夫、なんとか操縦系は生きている」

ログギアス中隊長はかろうじて意識を保ちつつ力なく応じた。

「敵は後退しました。レンドログは大破していて着艦できません。

黒星雲艦隊の船に着艦させてもらいましょう」

「了解した。君の機について行くからナビゲートを頼む」

黒星雲戦闘機隊になって、3人は傷だらけの愛機を黒星雲の戦闘艦隊に向けた。

「姉さん、あれが俺達の母艦だ」

正面の大きな漆黒の船体が太陽の光で黒光りしている。

「艦の名前はベルイベッシュだ」

全機、宇宙重戦闘艦ベルイベッシュに收容された。

艦内の整備班の整備兵や医務班の医者と看護兵達が中隊長機に駆け寄った。

すぐにコクピットから運び出され、担架に乗せられて医務室へと運ばれて行った。

アエリは舷窓から戦闘宙域を見た。

宙域全体に破壊された残骸が散らばっている。残骸に混じって、乗組員の遺体が浮かんでいる

。

「死んだ者はもう救えないが、まだ生きている者は救えるのか？」

アエリは、おそらくまだ残骸の中にいるであろう生存者は、孤独のうちに死んでいくのだろう、と恐れた。

アエリのそばに、弟とボング少尉が近付いてきた。

「姉さん、黒星雲の救難艦が、これから生存者を探して救助にあたるそうだ」

「レーページの駐留基地の救難艦も先程発進して、1時間後に到着するそうです」

「そう。たった1時間の戦闘で、あまりにも多くが死に過ぎた。生存者救出、遺体收容に時間がかかるでしょうね」

「俺が来なかったら、姉さん達もあの中に仲間入りしたかも知れないな」

「そう言えば、助けに来るタイミングが良すぎるわね。

こんな突然の戦争に対応するなんて、思ってもみなかった。『黒星雲』で宇宙海賊じゃなかったの？」

「人間きの悪いこと言うなよ。『黒星雲』は傭兵企業だぜ。そりゃ、場合によっては宇宙海賊と思われてもしかたのない仕事もあるけどさ」

「なんでまた、雇われてもいないのに戦闘に参加したわけ？」

「そりゃ、こんな危機の時にいちいち契約書なんか交わしてられないだろ。社長の一声で、とにかく加勢することになって。

ま、軍に恩を売っておけば、あとあと何かしら都合がいいだろ」

「所詮、そんな魂胆なわけね」

あきれ顔のアエリに、ボングがいつもの情報報告をするタイミングを待っていた。

「中尉、ひとつ面白い情報があります」

「話してみて」

「はい。それがどうも、中尉達が撃墜した敵機の一機が護衛戦闘艦フェウルズの横腹に突き刺さり、敵のパイロットを一人捕虜にしたそうです」

「じゃあ、敵の正体がわかるわね」

再び宙域に目を向けた。黒星雲宇宙戦闘艦隊は約30隻の陣容でレンドロークと2隻の護衛戦闘艦の周りを囲んで守っている。

ボングが付け加えた。

「レーベージ駐留基地に向かっているそうです」

弟が意を決したように告げた。

「姉さん、黒星雲艦隊司令長官が艦橋で待っている。行こう」

「わかった。ユラオン、あなたが来てくれて良かった。ありがとう」

ふとついて出た言葉に、アエリは自分自身驚いた。

ユラオンは少し照れた笑顔を見せて何も言わなかった。

3人は艦橋へ通じるエレベーターに向かって歩き出した。

艦橋に着き、エレベーターを降りると、紳士然とした人物がひとり、笑顔で手を差し伸べて来た。

「艦隊幕僚のカップデュールです。フォンダイナ中尉。御会いできて光栄です。あなたのお噂は弟さんから聞いています」

「初めまして。宇宙軍中尉アエリ・ナオ・フォンダイナです」

握手をしながら、アエリはちらっと弟の顔を見た。ユラオンは苦笑いした。

「自慢話しかしてないよ」

アエリはそれを無視して、傍らに立っているボングを紹介した。

「こちらはコーミ・ボング少尉です」

「初めまして。宇宙軍少尉コーミ・ボングです。よろしく」

ボングもカップデュールと握手した。

ユラオンがアエリの肩を軽くたたいた。促されて、提督座席に座っている人物を認めた。

きりりとした顔だちの初老の男性はアエリの顔を観察して軽く会釈をした。

「姉さん、司令長官だよ」

アエリは近寄り、握手を求めた。

「初めまして、司令長官。救援感謝します。宇宙軍中尉アエリ・ナオ・フォンダイナです」

「よろしく、中尉。黒星雲宇宙戦闘艦隊司令長官ゲウサル・バウル・パンレッドです」

「初めまして。宇宙軍少尉コーミ・ボングです」

「貴軍の不幸は残念だった。我々のできうる限りのことはしよう。未知の敵に対しては共に戦わねばならない」

「同感です、司令長官」

アエリはパンレッドの言葉に頷いた。

まもなくレーページが見えてきた。

「レーページの重力圏に入ります」

艦橋のオペレーターが報告する。

「敵艦5隻が6宇宙キロの距離を保ち、ついて来ています」

レーダーのオペレーターが敵の監視部隊らしき戦隊を発見した。

今度は通信オペレーターが大きな声で報告した。

「レーページ駐留基地から通信が入りました。回線をオープンにします」

艦橋のメインスクリーンに、基地司令の顔が映し出された。

「こちら、レーページ駐留基地司令クオミールだ。残存艦隊の護衛感謝する」

「黒星雲宇宙戦闘艦隊司令長官パンレッドです。貴軍の艦艇3隻と我々の入港許可を求めます」

「了解した。許可しよう。レーザーラインに沿って入港したまえ」

駐留基地からレーザーが照射され、空間に光の滑走路が浮かび出された。

まず宇宙重戦闘艦レンドログが入港する。続いて宇宙護衛戦闘艦セルポウ、フェウルズの順序で入港。

黒星雲艦隊は5隻の護衛戦闘艦を警戒に残し、28隻が順番に入港していった。

黒星雲艦隊の編成は、宇宙重戦闘艦3隻、宇宙軽戦闘艦6隻、宇宙軽航空母艦6隻、宇宙護衛戦闘艦15隻。

他に宇宙補給艦1隻、宇宙病院船1隻、宇宙救難艦1隻。

アエリは艦橋の窓から港内を見渡した。

入港したレンドログ、セルポウ、フェウルズの3隻はドックの壁にもたれかかるようにして止まっている。

さっきまで乗っていた船が無惨な姿をさらしていた。

各艦を基地の整備員や医務員があわただしく出入りして負傷者を運び出している。

下を見るとそばのゲートを通り、約10名の将官達が乗る基地内移動車がやって来た。

基地内移動車は車輪はあるものの、実際のところ、車というよりも空中移動する船と言った趣きがある。

中は広いが、乗車者は全員立って乗っていた。

「お出迎えのようです」

カップデュールが司令長官に告げた。

「では我々も出迎えよう。カップデュール、グーティ、フォンダイナ、同行を。中尉と少尉も御同行してください」

「はい」

アエリが返事するとパンレッドは立ち上がりエレベーターに向かった。

6人でエレベーターに乗り、メインハッチを出た。

ハッチの両サイドには黒星雲の警備兵が立っている。

丁度、先程の将官達が乗る基地内移動車がハッチまで浮き上がるころだった。

ハッチの正面に立って待つ。やがて移動車がハッチの前に接触した。

乗車しているクオミール司令官と幕僚4名、副官5名がいっせいに敬礼した。

「ようこそ、レーページへ」

クオミールがパンレッドに手を差し伸べた。

「クオミール司令、よろしく」

パンレッドが応じる。

アエリ達も移動車に乗り込む。

移動車はすぐに発進し、大きな応接室のドアに接触した。

応接室の広い会議用の机にそれぞれ座った。

5人の副官は接待のためにあわただしく動き回っている。

やがて11人分の飲み物が用意され、全員一息ついた。

「さて、今後の対応だが」

クオミールが切り出した。

「状況は厳しいですな」

パンレッドが対応した。クオミールが続ける。

「まず状況をまとめてみよう。」

敵は突然奇襲を仕掛けて来た。アーページの第106艦隊は緊急発進したが、迎撃する間もなく全艦撃沈されてしまった。

アーページの地上基地も爆撃により壊滅。航空軍と陸上軍はほぼ全滅。敵の揚陸部隊がアーページ全土を占領、掌握してしまった。

民間人の犠牲はどのくらい出たか皆目見当がつかない状況だ。

サーページ第107艦隊も緊急出撃したものの、交戦の結果大敗。

10隻の残存艦隊は残された退路に沿ってエレフォーズ恒星系方面に撤退した。

サーページもほぼ占領された模様だ。

敵の警戒部隊らしき5隻がレーページの基地上空にいる。

さすがにこのレーページは極寒の惑星だからか、今のところ、ここを占領する意図はないようだ。

もっとも、先程の貴官らの働きで思いのほか損害が多かったからかも知れないが」

「警戒して近付かないでくれるならありがたい」

パンレッドは軽く微笑みながら言った。

「今後どう対処するか、だが。」

戦闘艦がほぼ全滅の今、我々になすすべはない。

エレフォーズの第11宇宙軍司令部に救援を頼んだが、断られた」

クオミール司令は苦い表情で言い放った。

「来てくれないんですか？」

アエリは思わず叫んだ。

「敵の圧倒的な戦力に尻込みしてるのさ」

カップデュールが応える。

「むやみに救援軍を送っても、全滅するだけだ。そんな無謀は犯せないってことだろう」

グーティと呼ばれるパンレッドの幕僚が、隣のカップデュールに目を向けて話す。

「現在この基地に残っている戦力は

宇宙哨戒艦18隻、宇宙巡視艦24隻、宇宙補給艦3隻、宇宙輸送艦21隻、宇宙工作艦1隻、宇宙測量艦1隻、

宇宙哨戒艇36隻、宇宙巡視艇54隻。あと、宇宙救難艦5隻が戦闘宙域で生存者を搜索中だ。

基地防衛航空隊39機の内訳は宇宙迎撃戦闘機18機、宇宙攻撃機9機、宇宙雷撃機9機、宇宙偵察機3機。

防空ミサイル中隊5個、陸上軍守備隊は保安旅団1個、以上が全てだ。

他に民間の輸送船が7隻入港している」

「戦力と言えない戦力だな」

クオミール司令官の幕僚の一人が呟いた。

クオミールはそれを目で制して続けた。

「我々は今有る戦力で工夫して戦うしかないのだ。幸い、黒星雲艦隊が加勢してくれた」

「だが、我々として30隻の小さな部隊だ」

パンレッドは致し方ないという表情で付け加えた。

「敵が総攻撃をかけてきたらひとたまりもないな」

グーティのその言葉に対して、基地参謀長ウインザルム大佐が発言した。

「いや、そうでもないさ。戦い方はいくらでもあるはずだ。

ここには常に一度に3個艦隊のレクリエーションができるだけの補給物資がある。

もちろん、砲弾、銃弾、爆弾、レーザーエネルギーなど、武器弾薬の貯えもたっぷりある。

要はいかに工夫するか、だ」

「どう工夫する？」

弾が豊富にあったって、基地の補助艦艇では話にならないぞ」

驚いた表情でグーティが反論した。

「何も、正攻法だけが全てではない。

109隻あった敵艦隊は、40隻そこそこに減っていたはずだったな。

それならば、哨戒艇と巡視艇だけで90隻、数の上では1隻につき2隻以上だ。

爆薬を積んで、哨戒艦や巡視艦から自動操縦で敵艦に体当たりさせる。

それでも残存した敵艦は黒星雲艦隊に片付けてもらう」

「うまく当てることができるならな。

体当たりする前に全艦迎撃されて全滅するだろう」

「簡単に撃沈されないよう、奇襲ができれば、そう悪い作戦ではない」

「しかし、上空には監視部隊がいる。奇襲は無理だ」

「参謀長、準備にどのくらいの時間がかかるか？」

「90隻全ての準備は5時間あれば可能と思います」

「どうかね、司令長官？」

問かけられたパンレッドは

「箆城は自滅の道を歩む愚策でしかないのは、過去の歴史が証明している。

後のことを考えると、こんな大気もない極寒の惑星に留まる意味はない。

速やかに基地を放棄して脱出するべきでしょうな。

そのためには、参謀長の作戦は方法論としてやってみる価値はあるでしょう。

だが、敵は我々が交戦した部隊だけではない。アーページとサーページにもいる。

敵を殲滅することは現実的に不可能。考えないほうがよろしい。

とすると現時点での攻撃対象は上空の5隻のみにしぼればいい。

90隻全ての準備は必要ない。15隻で十分だ。

各艦艇に人員・物資を詰め込んで、攻撃実施後すぐ脱出すればいい」

「ふむ。それなら現実的に実施可能な作戦ですな」

クオミールは頷いた。

「15隻だけなら1時間くらいで準備もできるでしょう」

参謀長も納得顔である。

「ではこうしよう。すぐ準備にかかってくれ。

まずウインザルム大佐、哨戒艦5隻で哨戒艇15隻を自動操縦できるよう手配してくれ。君の指揮で自動操縦哨戒艇による攻撃を行う。

レケーガロフ中佐は支援攻撃の統率。参謀長の攻撃の援護だ。防空ミサイル中隊と防衛航宙隊で敵の気をそらしてくれ。

バンバム中佐とミーハク中佐は脱出の準備。宇宙艦に人員と資材の全てを積載する指揮をとれ。3時間で完了させろ。

黒星雲艦隊への補給も忘れるな。それと、救難艦の行動状況を確認して、安全な宙域に避難させろ。

自動操縦哨戒艇の出撃は積載・脱出準備完了を待って3時間後とする。

攻撃開始5分後に全艦艇は基地を脱出、エレフォーズへ向かう」

クオミール司令は参謀長、作戦参謀、情報通信参謀、補給参謀の4人に指示を与えた。

「ただちにとりかかります」

4人は即座に立ち上がり、敬礼して部屋を出て行った。

クオミールが基地司令の職務にあるのは、彼の適正によるところが大きい。

彼には宇宙艦隊の戦闘指揮能力に欠けるところがあり、後方勤務としての基地司令のポストが与えられた。

戦略・作戦についての適格な判断の欠如を自覚しており、自身の考えよりも幕僚の意見を尊重して取り上げる。

だが事務官としての能力には抜きん出たものがあった。

部下の意見を尊重するため、部下からの信頼や好感もあり、基地司令という職務はまさに適職だった。

パンレッドは正直なところ、心の中で苦笑した。自分はなにもエレフォーズへ逃げろとは言っていない。

小惑星群あたりに身を隠してゲリラ戦を展開することを前提にして話したつもりだった。

参謀長の作戦を修正支持したのも、ゲリラ戦のための戦力を温存できるからにすぎない。

今からそれを言うと角が立つ。ここは黙って従おうと決めた。

独自の行動をすることを告げるタイミングを見極めなければならない。

「フォンダイナ中尉」

クオミール司令が思い出したようにアエリに声をかけた。

「どうかね、敵と戦った感想は？」

「正体のわからない未知の敵ではありますが、恐れる必要はないと思います。

敵の戦闘能力は我々と互角だと判断します」

「フム。互角か」

「あの。捕虜になった敵のパイロットは？」

「今、情報将校の尋問を受けているよ。言語は不明だが、アルゴリズム解析でまもなく解読できるだろう。

さて、君達ふたりの愛機の損傷具合はどうかね？」

「被弾はしていますが応急修理ができれば戦闘はできます」

「ふむ。実は新型の宇宙主力戦闘機が3機届いている。試験用だが、武装を施せば使えるだろう」

「新型ですか？」

「F23アウルマク。F20バランザとF22フィードの性能を統合したような戦闘機だ。

テストパイロットの間では乗りこなすのが大変な戦闘機だと言われているようだ。

『じゃじゃ馬』とか『暴れ馬』とかニックネームがつけられているそうだよ。

だが、君達なら乗りこなせるだろう。

重宇宙母艦レンドルで飛行試験をする予定だったが、母艦もテストパイロット要員もさっきの戦闘で未帰還だ。

どうかね？」

「はい、喜んで搭乗させていただきます！」

アエリは喜色満面で立ち上がった。

「うむ。フェッデラ中尉、アウルマクの整備手配を頼む。

フォンダイナ中尉とボング少尉に各1機、残りの1機は黒星雲艦隊に譲渡しよう」

「よろしいのですか？」

副官のひとりフェッデラ中尉は驚いて聞き返した。

「ベテラン揃いだが保守的な基地防衛航空隊のパイロットでは乗りこなせんよ。

それに、年齢的、肉体的な健康面の制限による限界がある以上、彼等を搭乗させるわけにはいかん。

フェッデラ少尉、すぐ武装させるよう整備小隊に連絡してくれ」

「かしこまりました」

「新型機ですか。ありがたくいただきますよう」

パンレッドは礼を言ったあと、新たな整備要員が必要だなと思い、

「いっそのこと、フォンダイナ中尉とボング少尉、新型機の整備小隊をそっくりいただきたい。

我々の航空母艦でまとめて運営しましょう」

「ふむ。ではおまかせしよう。二人ともよろしいかな？」

「了解しました」

「では、頼む」

フェッデラ中尉が部屋の壁に備え付けの電話で整備部署に連絡していた。

彼は電話を切ると、視線が自分に注がれているのを感じたのだろう、会議室にいる全員に向かって大声で言った。

「ではみなさん、機体を見に行きましょう」

フェッデラ中尉に促されて、みな席を立った。クオミール司令だけは肘をついて座っている。

各自ぞろぞろと歩いて部屋を出る。

「姉さん、一緒に戦えるね」

ユラオンがアエリに声をかけた。

そして先に部屋を出て廊下を歩いている司令長官クオミールに話し掛けた。

「司令長官、新型機の3番機は自分に搭乗させていただきませんか？」

「そのつもりだよ、ユラオン・フォンダイナ」

微笑みながらクオミールは応えた。

「ありがとうございます！」

「ユラオン！ 小隊長は私よ。あなたは軍人じゃないけど私の命令には従ってよ」

「かしこまりました、小隊長！」

ユラオンはとても嬉しそうだ。

フェッデラ中尉がエレベーターの前で全員が揃うのを待っている。

アエリ、ユラオン、ボング、クオミール、カップデュール、グーティの6人は中尉に促されてエレベーターに乗った。

すぐに地下へ降下して基地の整備区画に着いた。

エレベーターから降りると、すぐ目の前に初めて見る新品の戦闘機が駐機されていた。

まわりでは、整備兵が忙しく動き回っている。

「これがF23アウルマクです。この基地に来ているのは試作7号機、8号機、9号機です。

試作1号機から6号機まではミュザー恒星系第6宇宙軍の指揮下で試験中です。

10号機、11号機、12号機はキャタレーク恒星系第10宇宙軍に届けられています」

「いい戦闘機ね。エンジンの型は何？ 速度はどのくらい出るの？」

「えっと、そういうことは整備小隊の人たちに尋ねてください。司令副官の私には専門外です」

「それもそうね」

「あ、ウェーギー中尉！」

フェッデラ中尉が前を通り過ぎようとしていた士官を見つけて声をかけた。

士官には違いないが、制服は油や埃にまみれて汚れていた。

「おう、フェッデラ中尉じゃないか。」

「貴様、上はどういうつもりだ？ こっちはてんでこまいだぞ」

「何かあったんですか？」

「どうもこうもあるか！ 基地を撤退するので逃げ出す準備をしろと言われたから、輸送艦に積み込めるように急いで解体し始めたんだぞ。」

「そこへ急に兵装をとりつけろだなんて命令が来たもんだから、みなあわてて整備しなおしているところだ」

「すみません、その命令、司令に言われて、私がコプリング少尉に連絡しました」

「そうか、貴様が。司令は何を考えている？」

そこでウェーギー中尉は周りに気がついた。

「おい、このお客さん達は？」

「あ、紹介します。第108艦隊のフォンダイナ中尉とボング少尉。

黒星雲艦隊のクオミール司令長官、幕僚のカップデュール氏とグーティ氏、中尉の弟さんのフォンダイナ氏です」

「よろしく、ウェーギー中尉」

アエリはまっ先に挨拶した。

「いや、みなさん、よろしく。で？」

「いやだからですね、コプリング少尉に伝えたんですが、

フォンダイナ中尉とボング少尉、弟さんの3人は新型3機の新しいパイロットです。

これからは黒星雲艦隊の指揮下で運営していただくので、お連れしたところです」

「黒星雲艦隊へか？ 整備はどうする？」

「整備小隊も一緒に配属ですよ」

笑顔でカップデュールが答えた。

「そうか、そういうことですか。って、フェッデラ、貴様、なんでそういう大事なことを俺に言わないんだよ？」

「コプリング少尉に聞いてくださいよ。私は全部彼に伝えたんですから」

そこへ、やはり油にまみれた少尉がやってきた。

「ウェーギー中尉！ 3機とも兵装の装備、及び整備完了いたしました！」

「おう、御苦労だった、リュンサム少尉」

リュンサムと呼ばれた少尉は女だった。華奢な体つきだが、芯は強そうだ。

「おい、コプリング少尉はどこだ？」

「あいつならまたどこかで油売ってるんじゃないですか？」

「こんな慌ただしい時にもか？」

「こんな時だからでしょ。整備は部下にまかせて、どこかで遊んでいるんですよ」

「コプリングの野郎。仕方ない。リュンサム少尉、とりあえずここにヒューバン少尉を呼んでくれ」

「了解しました」

そう言うと、リュンサム少尉はきびきびと歩いて行った。

すぐにもうひとりの少尉を連れて戻ってきた。ふたりが揃うとウェーギー中尉は紹介した。

「みなさん、第1整備分隊長リュンサム少尉、第2整備分隊長ヒューバン少尉です。

あいにく第3整備分隊長は席をはずしてまして、挨拶できませんが勘弁してください」

アエリ達は各自名乗り、ふたりに挨拶をした。

「そういえば、普通、分隊長は下士官クラスのはずですよね？」

ユラオンが疑問を投げかけた。

「なにしろ新型機の整備小隊ですし、整備兵のほとんどがベテランの下士官クラスなもので。

分隊長は士官じゃないとつり合いがとれないわけですよ」

「ああ、なるほど。ベテラン揃いなら整備は安心ですね」

「命賭けて整備しますので、よろしく！」

ウェーギー中尉は明るい笑顔で大きな声で言った。

少しいらいらしているフェッデラ中尉はウェーギー中尉に言った。

「ウェーギー中尉、3機のアウルマクの発進準備が完了したのなら、フォンダイナ中尉たちの搭乗よろしいですか？」

「よろしいものにも、いいんじゃないか？ けど、どこから発進するんだ？ 少なくとも、ここは地下だ。ここからは無理だぜ」

「当然です。基地防衛航空隊の発進エリアまで運んでください」

「それはやめたほうがいいわ。

基地防衛航空隊の発進エリアは北の端にあるから、機体を解体せずに移動運搬するのは大変よ」

アエリはフェッデラ中尉とウェーギー中尉の顔を交互に見た。

「じゃ、どうする？」

「輸送用移動車で黒星雲艦隊の軽航空母艦まで運んでください。

母艦からなら、基地内でも宙域でも発進する自信があるわ」

「移動車はみな撤退準備に使われていて、俺たちが使えるのは残っていないだろう」

「それはもう準備しました」

みなが声のした方を見ると、若い少尉が立っていた。

「コプリング！ いったいどこにいた？」

「アウルマクを運ぶ輸送用移動車を手配してきました」

「そうか、ご苦労」

コプリング少尉の目は少し赤く、どこか悲しい表情をしていた。

「いえ、じゃ、あとをよろしく」

気の抜けた声でコプリングは反応した。そして黙って敬礼して去って行った。

フェッデラ中尉が気をとりなおしてウェーギー中尉に言った。

「整備小隊も黒星雲艦隊の軽航空母艦に乗り込んで下さい」

「言われなくともわかってるよ。だが、どの艦に乗るのかな？」

「3番艦のケレシークがいいだろう。さっきの戦闘で5機の未帰還があるしな」

パンレッドが答えた。

「了解いたしました。さっそく乗り組みましょう！」

「さて、我々は邪魔にならないうちに艦へ戻ろう。作戦開始までまだ2時間あるが、発進準備をしておこう」

パンレッドの言葉に、カップデュールとグーティは応じた。

「はい、そうですね、戻りましょう」

7人は再びエレベーターに乗り、艦のある港へ向かった。ユラオンは残った姉たちに向き直り言った。

「姉さん、ボング少尉、私物があるなら今のうちにケレシークへ運んでおいたほうがいいよ」

「気をきかせてくれてありがとう。でも大丈夫。基地に私物はないわ」

「え、そうなの？」

ユラオンは姉と少尉の顔を見比べた。

「レーベージ基地の駐屯は1ヶ月ローテーションなの。

あくまでも母港はアーベージのファンレスク基地であって、住居もアーベージなの。

母艦のレンドログにしても、大事なものは載せてないから。

必需品は今着ている、このパイロットスーツと身につけているものが全てね」

アエリとボングのパイロットスーツは、体のラインがわかるほどすっきりはしている。

だが、確かに黒星雲のパイロットスーツに比べてやや重装備だ。

宇宙において生存可能なあらゆる小型装備をそなえつつ、個人の必需品も内蔵した優れたスーツだ。

腰と背中の中の小型の背囊には、小さいが個人の大切なものは入っているのにちがいない。

「へえ、知らなかった。黒星雲はそこまで徹底していない。

ん、姉さんどうしたの？」

ユラオンは何かもの思いにふけた表情のアエリに気が付いた。

「いや、さっきのコプリング少尉のこと」

「姿を消してた少尉？」

「私たちの第108艦隊の戦死した司令官はコプリング中将なの。ひょっとして息子さんじゃないかしら」

「司令官の息子が新型機の整備将校？」

「多分ね。目が赤かったけど、おそらく家族の戦死を悲しんで涙を見せるのが嫌で隠れて泣いたのかも知れない」

「もしそうだとしたら、そりゃ、気の毒だけど、今は個人の死をいちいち悲しんでいる時じゃない」

「人はそれぞれの思いを持って生きている。それを非難する権利は誰にもないわ」

「こちらとしては、ちゃんと新型機の整備さえやってくれれば何も文句を言うつもりはないけどね」

アエリは思った。もし自分が戦死したらユラオンもコプリング少尉の今の心を理解するだろう、と。

だが、コプリング少尉が司令官の息子かどうかは、アエリの推測でしかない。ボング少尉なら何か知っているだろう。

アエリは振り向き様ボング少尉に尋ねた。

「ボングは司令官の息子さんについて知ってる？」

「はい。コプリング司令官には2人の息子さんがいます。

長男は重航宙母艦レンドルの通信将校コプリング大尉。

次男はミュザー恒星系第6宇宙軍の試験部隊の整備将校だと聞いています。

たぶんコプリング少尉は次男のほうでしょう」

「じゃあ、お父さんとお兄さんが同時に戦死したわけだ。平静でいると言うほうが無理だな」
しばらくおとなしかったカップデュールが話に割って入った。

「カッデュも奥さんが死んだ時大泣きしたもんな」
ユラオンがカップデュールを愛称で呼んでからかう。

「それを言うなよ」

「奥さんがいたの？」

「去年、病気で亡くなられてね。3日間泣き続けてたんだぜ」

「ユラオンはまだ若いから、平気でそんなことを言うのね。カップデュールさんがかわいそう」

「いいんですよ、いつものことですから」

ほどなくベルイベッシュの下に着いた。

「我々は艦に戻ります。グーティ、おふたりをケレシークにお連れしろ」

パンレッドがグーティに命じた。

「じゃあ姉さん、俺は自分の荷物をケレシークに運ぶよ」

「じゃ、後でね。グーティさん、案内よろしくお願いします」

ここでパンレッド、カップデュール、ユラオンの3人はベルイベッシュに乗り込んだ。

残った4人はケレシークへと向かう。グーティがケレシークのハッチにいるふたりの警備兵に声をかけた。

「艦隊幕僚のグーティだ。ハウター艦長を呼んでくれ！」

「はっ！ 少しお待ち下さい」

左右の警備兵は同時に敬礼した。そして、左の警備兵が近くの艦内電話で艦橋にいる艦長に連絡した。

受話器を置き、グーティたちに向き直った。

「すぐ来られるそうです」

「ご苦労」

ほどなくして、艦長がハッチまで降りて来た。後ろに副官らしき二人を伴っている。

「グーティ、さっき司令長官から連絡があった。軍の新型機を3機、手に入れたそうだな」

「ああ。ケレシークで運営してもらいたい。

こちらはパイロットのフォンダイナ中尉とボング少尉、基地司令副官フェッデラ中尉だ」

「初めまして、艦長」

「初めまして」

「初めまして。よろしく」

「フェッデラ中尉、書類を頼む」

「はい。艦長、これが新型戦闘機F23アウルマクの性能緒元及び譲渡の書類です」

「ほう、あの『じゃじゃ馬』か。こんな軽母艦で運営できるのか？」

「専門の整備小隊も一緒に配属されてくる。パイロットも優秀だ。大丈夫」

「了解した。カウンテッド、受け入れの準備状況の確認をしてくれ。レイエー、お二人をガンルームにお連れしろ」

「は、ただちに」

命令を受けた後ろの二人は敬礼をしてそれぞれの行動に移る。

カウンテッドはすぐ姿を消した。飛行甲板に向かったはずである。

レイエーはアエリとボングに会釈した。よく見ると女だった。

「ではフォンダイナ中尉、ボング少尉、ご案内します」

「私は司令部へ戻ります。みなさんお気をつけて」

フェッデラ中尉はアエリたちに敬礼した。アエリがはっきり返事する間もなく立ち去った。

ハッチから中に入ろうとしたところで、上空から声が聞こえてきた。さっきのウェージー中尉の声だ。

「おーい！ 受け入れ態勢はできているのかぁ？ 最新鋭機を3機も持って来てやったぞー！ 責任者は誰だぁー？」

見ると、輸送用の大型移動車3台が浮かんでいる。アエリとボングは思わずクスと笑った。

「幕僚のカウンテッドだ。受領する」

カウンテッドの声が聞こえた。大型移動車が着艦するのを振動で感じながら、アエリたちは階段を降りて行った。

ガンルームには、黒星雲のパイロットたちがいた。

以外とみな若い。その上、3分の1は女性だった。どおりでアエリたちが配属されたわけだ。

「ここは女性中心に編成された戦闘機中隊です。もちろん男性のパイロットもメンバーにいます」

レイエーの言葉に、アエリはうなずいた。

「みなさん初めまして。宇宙軍中尉アエリ・ナオ・フォンダイナです」

「初めまして、宇宙軍少尉コーミ・ラベーラ・ボングです」

「おふたりともよく来てくださいました。私は中隊長のエベルナ・パミ・ノーミングです」

やや中年にさしかかる手前の年齢と見受けられる女性が手を差し伸べて来た。

「よろしく、ノーミングさん」

「さて、今中隊の再編成が終わったところです。あなたたちも組み入れてあります」

そう言われてアエリとボングが覗き込むと、机上の紙に部隊編成が書かれてあった。

内容は以下のとおりである。

黒星雲第15軽航宙母艦航宙隊

第30戦闘機中隊

第1小隊

1番機	FBC-005ジェクリー	機番号301	黒星雲一級尉官	中隊長	エベルナ・パミ・ノーミング
2番機	FBC-005ジェクリー	機番号307	黒星雲二級尉官	ゴルイアッグ・ビルクイ・バイオーク	
3番機	FBC-005ジェクリー	機番号302	黒星雲三級尉官	アーメイ・アイ・キルクス	

第2小隊

1番機 FBC-005ジェクリー 機番号304 黒星雲二級尉官 小隊長 コルフィ・ピオ
・フィーラー

2番機 FBC-005ジェクリー 機番号308 黒星雲三級尉官 ジャイナ・マリユ・レド
クオセイオ

3番機 FBC-005ジェクリー 機番号306 黒星雲上級下士官 マリー・レイ・ウェ
ルコー

第3小隊

1番機 F23アウルマク 機番号2307 宇宙軍中尉 小隊長 アエリ・ナオ・フォンダ
イナ

2番機 F23アウルマク 機番号2308 宇宙軍少尉 コーミ・ラベラ・ボング

3番機 F23アウルマク 機番号2309 黒星雲二級尉官 ユラオン・レル・フォンダイ
ナ

「我々の部隊編成は、軍と同じです。

軽航空母艦の航空隊は戦闘機中隊2、攻撃機中隊、雷撃機中隊、偵察機小隊各1です」

グーティが説明する。アエリは思い出したことが考えるより先に口から出た。

「敵はたぶん4機編隊でした。2機ずつに分かれ、3機編隊の我々に対して後ろの3番機から攻撃をしかけてきました」

「ほう、初耳ですね。会議では言わなかった」

「会議では脱出の話だったので忘れていました。編成表を見て、今思い出したんです。

でも戦闘中のことですし、確かではありません。そうだったような気がするだけです」

「ボング少尉は気付かれましたか？」

「いえ、自分はわかりません。後方につかれたのは一瞬のことなので」

「しかし、会議で述べたように、戦闘能力は互角です。

実際、自分が5機以上の敵機を撃墜したのは確実です。

要領さえつかめば、恐れる必要はありません」

「なるほど。フォンダイナ中尉、この脱出作戦の後、その事に関してレポートを提出していただけますか？」

「了解しました。後で書いてお渡しします」

「よろしくお願いします、中尉」

グーティは壁の時計を見た。

「さて、そろそろ私もベルイベッシュに戻らなくてはなりません。

活躍に期待します、フォンダイナ中尉、ボング少尉。

ノーミング中隊長、よろしく頼みます」

「おまかせください、グーティ二級佐官」

「では」

とグーティは軽く敬礼のような仕草をしてガンルームを出た。

「中尉」

ノーミングがアエリに声をかけた。

「この艦の射出カタパルトは軍のものより射出速度が速いので注意してください」

「射出速度ですか」

「ええ。ジェクリーに合わせてあるので。

アウルマクがどのくらいの射出速度が理想なのかは、あなたがたが発進されてみなければわからないでしょう」

「そういえば理想的な射出速度なんて機能要目に記されていませんね。

まだ測定されていないからでしょう」

「基地からの発進をしないのは、基地の射出カタパルトがお嫌いだからですか？」

「いえ、発進エリアまでの機体の運搬が大変だからです。

機体を解体しないで発進エリアに通じるトンネルを通ることは、まず不可能です。

解体してうまく運べたとしても、組み立てに時間がかかり過ぎます。

基地防衛航空隊全機発進のあとに、のこのこカタパルトに装着して発進なんてしたくありませんから」

「新鋭機が遅れて発進じゃあ、かっこつきませんね」

ノーミングは笑った。

本当は基地防衛航空隊に苦手な奴がいるから、とは言えなかった。

以前、同じ隊にいたカウト中尉。パイロットとしての腕は確かだが、鼻につく嫌な奴。

気があるのか、ことあるごとにアエリにちょっかいを出す。よくいたずらをされた。

性格的に好きになれないタイプだった。

行いが悪かったためか、基地防衛航空隊へ異動したのは、左遷だとの噂があった。

おかげでアエリ自身はカウトのちょっかいに煩わされることがなくなり安心した。

アエリとしてはそいつと顔を合わせることは避けたかった。

それを知っているボングも黙っていた。

「お互い生き残ったら、ささやかなパーティを開きましょう。

料理と飲み物は私が用意しておきます。よろしい？」

意外なノーミングの提案に、ふたりは内心驚いた。

「はい、よろしくお願いします」

そう言うのが精いっぱいだった。

「作戦開始までここで待機していて下さい。私は艦橋へ行ってきます」

「了解しました」

ノーミングは敬礼して部屋を後にした。

アエリとボングは、気を緩めて近くの椅子に座った。

ボングはレンドログの知人に電話をかけ始めた。

「コーミです。レンドログの被害状況は？」

艦橋は無事。格納庫が火災で、整備小隊がほぼ全滅。第3砲塔も破壊されて死傷者多数。

そう。ひどいのね。レアノス航空長は無事。ホリーク航空隊隊長は重傷。ヒンシア料理長は手に火傷だけ。

ありがとう。フォンダイナ中尉と私は黒星雲艦隊の軽航空母艦乗り組みになったの。

うん。そう。じゃあ、またあとで。よろしく」

電話が終わり、ボングはアエリの顔を見て肩をすぼめた。

そばに座っている女性パイロットが話しかけてきた。

「フォンダイナ中尉、ボング少尉、初めまして。

黒星雲上級下士官マリー・レイ・ウェルコーです」

「初めまして。どうぞよろしく」

女性のアエリから見ても、可愛らしい少女のようなパイロットだ。

三人は、とめどない会話で時間を費やすこととなった。もう時間は限られていたが。

故郷の星の話、好きな歌の話、食べ物の話。どんなことを話そうかと考えながら、相手の話を

聞いていた。

アエリが料理長のパナパの話をし始めた時、放送があった。

「作戦開始15分前。第一戦闘配備。パイロットはただちに搭乗せよ」

三人が放送の声のスピーカーに顔を向けた時ノーミングが戻ってきた。

まわりにいた他のパイロットたちは立ち上がっていた。

「さあ、出撃だ。航空隊隊長が来るぞ」

雷撃機中隊中隊長が注意する。30代後半のやせて目が血走った男だ。

三人も立ち上がる。

ノーミングの後ろから中年の男性が入って来た。

マリー・ウェルコーが小声でアエリとボングに耳打ちした。

「ケレシーク航空隊隊長アンジェップ三級佐官です」

アンジェップが威厳のある面持ちで命令を発した。

「各員、ただちに搭乗せよ」

その場にいた全員が一斉に敬礼した。

部屋の出口は各中隊ごとに別れており、各員それぞれのドアから出て行った。

アエリとボングはウェルコーにうながされたドアから出た。

カタパルトのある発艦フロアに行くと、ユラオンが待っていた。

ウェージー中尉の指揮のもと、すでにアウルマクもカタパルトに装着されていた。

アエリは自分達がおしゃべりしていた間も彼等整備小隊は働いていたことに感謝の念を持った

。

今は礼の言葉よりも、戦果をあげることが、最大の返礼のように思われた。

ユラオンが黙って姉にうなずいた。アエリも無言でうなずき返した。

黒星雲のパイロットたちはすでに各自の愛機のコクピットに搭乗しつつあった。

アエリとボングもずっと手にしていたヘルメットをかぶり、アウルマクのコクピットに乗り込んだ。

それを確認したユラオンも3番機に乗り込んだ。

黒星雲の発艦誘導員が誘導ランプの色を赤から緑に変更した。発艦準備よし、の合図である。

まもなく作戦開始である。

ケレシークのエンジンの振動とアウルマクのエンジンの振動がコクピットまで伝わってくる。

作戦開始の時間となった。

大量の爆薬を積んだ無人の哨戒艇15隻とそれを操縦する哨戒艦5隻が発進した。

同時に防空ミサイル中隊が持てる全てのミサイルを発射した。目標はもちろん上空の敵艦5隻である。

発射し終わった中隊はあわただしく1隻の哨戒艦に乗り組んだ。

ミサイルは敵艦の迎撃でほとんどが破壊された。

3発だけ生き残り、1発が1隻の第2砲塔に当たって炸裂、2発が僚艦の脇をかすめ、破壊された

。

牽制のため、上空待機をしていた黒星雲艦隊の5隻の護衛戦闘艦が側面から砲撃をかけた。

敵艦もそれに応戦する態勢をとろうと反撃のビーム射撃をしてきた。

黒星雲護衛戦闘艦の1隻キッキリングが直撃を受け、艦橋後方に被害が出た。

哨戒艦シェトロックで指揮をとるウインザルム大佐が自動操縦哨戒艇15隻の突撃を命令した。

。

アエリはケレシークのカタパルト上で発進を待ちながら、モニターで哨戒艇の突撃の様子を観察した。

自動操縦哨戒艇は敵艦5隻全部に体当たりし、2隻を大破、1隻を中破、2隻を小破させた。

15隻中、進路を反れて当たらなかったのは3隻のみだった。しかしそれらは敵艦の射撃で破壊された。

クオミール司令は哨戒艦クマクルスの艦橋で指揮をとり、全艦発進を発令した。

哨戒艦8隻、巡視艦24隻、補給艦3隻、輸送艦21隻、工作艦、測量艦各1隻が基地を発進。

重戦闘艦レンドログと護衛戦闘艦2隻も続いて発進した。

応急修理を施したとはいえ、傷付いた体は痛々しく、航行可能なのが不思議なくらいだ。

黒星雲艦隊もほぼ同時に発進した。

重戦闘艦はベルイベッシュ他2隻、軽戦闘艦6隻、軽航空母艦はケレシーク他5隻、護衛戦闘艦10隻、補給艦、病院船、救難艦各1隻。

生存者の捜索をしていた5隻の救難艦は3隻が小惑星群近くに退避。

2隻が戦闘後の防衛航空隊機とパイロットの救難・収容のため、基地近くに戻ってきていた。

宇宙救難艦は、もともと海上軍の救難艦が宇宙用に発展した艦種である。海上の救難艦は航空機の救難が本来の用途だった。

その意味では、宇宙において本来の用途目的に使用される形となる。

駐留基地の艦艇のうち、恒星間航行のできない哨戒艇と巡視艇は基地に破棄された。

恒星間航行のできる全艦が戦闘宙域の横をかすめていった。

全艦発進の発令とともに、レーベージ駐留基地防衛航空隊は全機発進し、傷付いた5隻に猛攻をかけようと急上昇していった。

基地防衛航空隊の宇宙迎撃戦闘機18機は宇宙攻撃機9機、宇宙雷撃機9機を護衛しつつ、編隊を崩さずに上昇していく。

黒星雲艦隊の重戦闘艦と軽航空母艦は上昇しつつ、艦載機を発進させた。

ケレシーク航空隊隊長アンジェップが「発進」の命令を下した。

アンジェップもまた機上の人であった。第15攻撃機中隊を直接指揮していた。

ケレシークの全艦載機がカタパルトから同時射出された。

アエリ・フォンダイナ機、ボング機、ユラオン・フォンダイナ機の3機のアウルマクも勢いよく射出された。

思っていたよりも射出はスムーズだった。「じゃじゃ馬」というあだ名とは正反対だった。

カタパルトの射出速度がジェクリーに合わせた速度だったから、というわけではないようにアエリは感じた。

アウルマクは軍のカタパルトの比較的遅い射出速度でも高出力のエンジンで強引に高速射出で

きるはずだ。

にもかかわらず今の高射出速度においても軽やかでなめらかな操縦性能を維持していた。

それはまさに、F20バランザの射出性能の良さとF22フィードの汎用性のある射出性能の融合でもあった。

第30戦闘機中隊は中隊長ノーミング機を先頭に、縦一列に揃い、敵艦に攻撃をしかけるべく、急上昇した。

アエリとボングが加わった黒星雲航空隊は、先の戦闘で重戦闘艦搭載戦闘機27機が18機に減っていた。

軽航空母艦搭載戦闘機108機は75機に、攻撃機54機は35機、雷撃機54機は32機に減っていた。

そしてそこにアウルマク3機が加わる。

アエリはボング少尉と弟のユラオン・レル・フォンダイナがぴったりと後方を着いて来ていることに安心感を覚えた。

右翼前方に黒星雲艦隊の宇宙雷撃機の編隊が飛んでいる。後方上空に、上昇中の基地防衛航空隊が見えた。

アエリは「やはり基地のカタパルトにしなくて良かった」と思った。

防衛航空隊の攻撃機や雷撃機がレーベージ地表から発進したのに比べ、アエリ達は母艦の加速も加わり、攻撃の先陣となった。

黒星雲艦隊の軽航空母艦6隻の第13から18の各航空隊は完全編成でないにもかかわらず組織的な攻撃を実施した。

実質的には各攻撃機中隊・雷撃機中隊は2個小隊編成となっており、初戦の時の3個小隊編成ではなくなっていた。

第15雷撃機中隊も初戦で4機を失い、5機を隊長機と2機編成の小隊2個に分けて編成していた。

最初に第15雷撃機中隊が攻撃をしかけた。

第15雷撃機中隊の中隊長は、さっきガンルームで注意をうながした人物だ。

雷撃機のテムカ宙対艦宇宙電子魚雷はよく装甲を破壊した。

攻撃機のコムク宙対艦ミサイルをそこにぶち込むことで誘爆を引き起こした。

アンジェップの操縦する攻撃機が鮮やかな一撃離脱を繰り返し、コムク宙対艦ミサイルを確実に標的に当てていた。

大した抵抗もなく、攻撃しやすかった。

すでに損害を出している敵艦5隻は十分な防御能力がなくなっていたのだ。

大破・中破していた3隻はなすすべなく、またたく間に撃沈された。

その攻撃時、残る2隻の迎撃で雷撃機2機が撃墜され、攻撃機5機も撃墜された。戦闘機1機も犠牲になった。

アエリ達も敵護衛戦闘艦に対してミサイル攻撃や銃撃などの攻撃を行なったが、装甲の厚い艦体にはあまり効果がなかった。

ふと左翼を見ると、ようやく基地防衛航空隊が戦闘宙域に到着したところだった。

艦隊の後方で、発進に手間どっていた民間の輸送船7隻の最後の1隻がようやく発進して上昇してきた。

これで、全ての艦船が発進し終わったはずだ。

その輸送船シェルクカルエス号が遠ざかるのと反対に、レーページ基地防衛航宙隊が接近してきた。

戦闘宙域に到着したばかりの雷撃機と攻撃機が、いまなお対宙防御砲火の抵抗を続けている2隻の敵護衛戦闘艦に対して肉薄した。

雷撃機B19マーゲインの9機編隊が第一目標の敵護衛戦闘艦にレク宙対艦宇宙電子魚雷の集中攻撃をかける。

そして攻撃機A18ホルク9機がミフ宙対宙ミサイルでとどめをさそうと攻める。

その後、戦闘機がマフ宙対宙ミサイルを放つ。戦闘機は防空用に開発されたF21ピットリアである。

アエリ・ナオ・フォンダイナ中尉機のアウルマクとその僚機2機も同じ敵艦に攻撃を加えていた。

敵艦の後方が大爆発を起こし、残るは1隻と思った瞬間、基地防衛航宙隊の攻撃機1機から悲鳴のような通信があった。

「見ろ！ 敵艦の残骸から何か出てくる！」

アエリが声につられて残骸に目を向けると、その残骸からぞろぞろと丸いものが出て来ていた。

直径約1.5メートルの黒い球体だ。

またたく間に約100個くらいに増えたが、まだ出てきつつある。個人用脱出ポッドのように見える。

先に出て来た球体のうちの5個がスピードをあげて移動したかと思うと、接近して観察していた雷撃機にとりついた。

球体は爆発し、雷撃機は飛散した。敵の決死の特攻兵器のようだ。

「姉さん！ 気をつけて！」

ユラオンの声にハッとすると、球体3個がアエリ機に接近してきつつあった。

ユラオン機とボング機が後方から左右に突出し、20ミリ機関砲で撃破した。

「とりつかれないよう気をつけろ！ 敵の球体はもろい！」

アンジェップの声だ。

「防衛航宙隊戦闘機隊が引受ける！ 対艦攻撃に集中せよ！」

聞き覚えのある声が聞こえた。

アエリのかつての教官だったギオクフ少佐。アエリは思わず叫んだ。

「教官！」

ふっと少佐の声から洩れた息の音が聞こえた。

「ナオ！ 気を抜くな！」

「了解！」

前方に4個の球体を認め、アエリは機関砲で破壊した。

両翼の2機も数個の球体を撃破しつつある。

左斜め後方に15個くらいの球体を認め、急旋回した。ユラオンもボングも付いて来る。

右に一瞬視線を向けると、ノーミング機以下6機がやはり球体と格闘していた。

アエリの小隊は15個ほどの球体群を撃破し、すぐその後方にいた約30個の球体めがけて旋回した。

球体群もただ撃破されているわけではない。すでに4機の宇宙機が自爆の餌食となっていた。

残る敵艦1隻に攻撃を集中していた雷撃機、攻撃機にも球体の特攻が迫りつつあった。

それらの球体群を基地防衛宇宙隊の戦闘機が必死になって撃破していった。

アエリが機体を反転させて急降下に移した時、突然エンジンががたがたと大きな振動を起こした。

「しまった！ これか！？」

そう悟った時にはもう遅かった。

だが、目を通したレポートの注意項目にあった内容とはちょっと違う。

ニックネームが『じゃじゃ馬』の理由はこれじゃない。

じゃじゃ馬の所以は、操縦システムが利きづらくなるというものだったはず。

アエリたちの操縦技術でなら操れるとクオミール司令が言った言葉を思い出していた。

ユラオンとボングの2機も一緒に反転、急降下したため、同じ症状を出していた。

速度が落ちたところに、約10個の球体群が向かって来た。

「とりつかれる！」

思わず叫んだ。

3個の球体が急接近してきた。

そのうちの1個がとりつく寸前、爆発、飛散した。

「大丈夫か？ フォンダイナ！」

知っている声。カウト中尉。あいつだ。

「暴れ出した！ でも操ってみせる！」

アエリはエンジンに流れる燃料エネルギーの量を下げ、振動を抑えようと試みた。

少し振動が小さくなった。

「中尉！」

ボングの悲痛な叫び声が聞こえた。

球体がボング機にとりつきつつあった。

アエリは急旋回してボング機の脇の球体群4個を撃破した。

なぜかはわからないが、旋回したとたんに振動は収まった。

ユラオンの機体も振動が収まったらしい。

ボング機も振動が少し残っているようだが収まりつつあるようだ。

右にさっきのF21ピットリア、カウト機が接近してきた。

「無事か？」

「大丈夫！」

そこに今度は3個の球体が後方からひそかに接近してきた。

ユラオンが反転して2個を撃破した。反転時に、少しだが再び振動を起こした。

残った1個がアエリ機に接近してきたが、反転せず速度を急に落としたカウト機に当たり、爆発した。

「カウト！？」

「無事か？」

「大丈夫！ そっちこそ！」

「やられたよ。もう長くはもたない」

「黒星雲の母艦に帰投を！」

「死に際くらい、かっこつけさせてくれ」

「死ぬな！」

「新型機を大事にしろよ」

その言葉を最後に、カウト中尉のピットリアは爆発飛散した。

「カウトー！！」

アエリは思わず泣いていた。あふれる涙を拭くことも忘れ、泣いた。

「姉さん！」

ユラオンが心配して声をかけてきた。機をアエリ機にぴったり寄り添わせている。

ボングも黙ってアエリ機に寄り添って飛んでいる。

言葉はなかった。

球体群があらかた片付いた時、黒星雲艦隊の軽戦闘艦3隻が戦闘宙域に接近してきた。

味方機を誤って撃墜しないため、攻撃は控えている。

ノーミング隊長機から命令がきた。

「全機、すみやかに母艦に帰投せよ」

宙域を飛び回っていた全航空機が、宙域を離脱して、大破した敵艦1隻と破壊された4隻の残骸と球体群の無惨な姿だけが残った。

黒星雲軽戦闘艦の攻撃で、残る1隻も完全に破壊され、戦闘は終わった。

敵主力艦隊の動きは見られなかった。

この戦闘を静観していたようだ。

生き残った航空機は艦隊に合流し、母艦に收容された。基地防衛航空隊の数機は黒星雲艦隊の軽航空母艦に收容された。

クオミール司令から全軍に布告があった。

「諸君、よくやってくれた。ご苦労だった。各艦は速やかにエレフォーズへの航法準備をし、でき次第各自出発のこと」

ケレシークのガンルームに戻ったアエリは、まわりのパイロットの数が減っていることも気付かず、うつむいていた。

宇宙重戦艦ベルイベッシュの艦橋で、パンレッド司令長官は哨戒艦クマクルスのクオミール司令へ通信をした。

「クオミール司令、我々黒星雲艦隊はエレフォーズへは行きません」

「何ですと？」

「我々はソーページ小惑星群に隠れてゲリラ戦法で戦います。1カ月は保たせます。それまでには援軍を届けていただきたい」

「了解しました。残念ですが。貴軍の健闘を祈ります。必ず、援軍を連れて戻ってきます」

「司令、頼みましたよ」

そこに、割って入った者がいた。

「クオミール司令！ 我々も残ります」

「シェルコレッグ大佐。貴官の補給隊はぜひとも連れて帰りたい」

3隻の宇宙補給艦で編成された第108宇宙補給隊の司令シェルコレッグ大佐は思い詰めたような表情でクオミールに訴えた。

「申し訳ありません、司令。黒星雲艦隊が残るのなら、我々にはそれを支援することができます。

また、そうすべきだと思います。司令、許可をお願いします！」

「ふむ。少し待て。残すべき艦艇は補給艦だけでは不足だな」

クオミール司令は左にいる副官のフェッデラ中尉の顔を見た。

「中尉。工作艦リー口と防衛航宙隊パイロットを載せた救難艦2隻、輸送隊1個も残す。

特に予備の航宙機と補給物資を多く積載した輸送隊を選んでくれ」

「かしこまりました」

フェッデラ中尉はすぐ各艦艇に連絡をとり始めた。

クオミールはスクリーン越しで待っているシェルコレッグ大佐にむきなおった。

「大佐。工作艦1隻と救難艦2隻、輸送隊1個も残す。しっかり支援してくれ。よろしく頼む」

「ありがとうございます、司令」

喜びの表情を浮かべた大佐は敬礼して通信を切った。

クオミールは再びパンレッドに通信をつないだ。

「パンレッド司令長官、再びすまない。

補給隊司令が残ると言って来た。だがそれだけでは足るまい。

第108宇宙補給隊3隻と工作艦1隻、それと…」

フェッデラ中尉が残す輸送隊のデータを持って来た。

「それと救難艦2隻、第323宇宙輸送隊7隻を貴隊の支援に残す」

「それはありがたい。思う存分暴れまわってやりますよ」

「期待します、司令長官。ページ恒星系を守ってください」

パンレッドは微笑んで、黙って敬礼した。

クオミールも敬礼した。

やがて各艦から航法準備完了の報告が入って来た。ほとんどが哨戒艦、巡視艦、輸送艦だが。

宇宙艦の恒星間航法は、通常航法のパルスエンジンとは別の時空力場エンジンを始動すること

で得られる。

時空力場エンジンは人工的に重力場を作り、艦の存在する空間を独立したフィールドにする。理論的には、最高速度はビッグバン時の宇宙の広がり速度まで可能とされている。

だが、現在の技術ではまだそこまでの速度は得られていない。

現在の技術では、初速は光速と同じ速度であり、最大光速の200倍まで可能である。

超光速時、空間の時間は外の空間と相対的にゼロとなる。

が、時空力場空間内の時間は独立した時間軸となり、重力場と速度のバランスによって一定の時間速度を保つ。

最初に出発したのは宇宙測量艦レクデイルだった。艦種柄なのか、超光速には慣れている。

やがて1隻、また1隻と恒星間航法に移っていった。

エレフォーズ恒星系までは約5光年の距離がある。最高速の200光速なら約10日で着く。

1カ月という時間は、援軍を組織し、ベージ恒星系へ戻ってくるにはぎりぎりの時間だった。

後に残った黒星雲艦隊と補給隊、輸送隊等の艦艇はパンレッドの指示で小惑星群へと移動した

。

恒星ベージに近い順から、4番惑星アーベージ、5番惑星サーベージ、6番惑星シーベージ、ソーベージ小惑星群、7番惑星レーベージとなる。

1番から3番までは灼熱の惑星。居住可能惑星はアーベージとサーベージ。シーベージにはドーム型の巨大な都市国家が3つ建設されていた。

人口はわずか26万。ちょうどアーベージ、サーベージの裏側となっており、まだ敵に気付かれていなかった。

パイエン恒星系人類が宇宙に進出して250年。

12の恒星系から成るフォストパイエン星域を領域として発展してきた。

ベージ恒星系にパイエン恒星系の人類が植民移住して52年が経つ。

アエリ・ナオ・フォンダイナは移民三世。ベージ暦52年の今年、ナオは23歳になる。

顔をあげたアエリは、なにげなく舷窓から宇宙をながめた。

かたわらではユラオンとボングが心配そうにアエリをみつめていた。

宇宙には星がひしめいている。だが星は彼女に何も語りかけない。

宇宙は孤独。

「それは真実」と彼女は思った。